

氏名	大松 慶子 ^{オオマツ ケイコ}
学位の種類	博士（作業療法学）
学位記番号	健博 第130号
学位授与の日付	平成29年3月25日
課程・論文の別	学位規則第4条第2項該当
学位論文題名	幼児の意味のある作業とは ～発達障害領域の作業療法士へのインタビューから～
論文審査委員	主査 教授 石井 良和 委員 教授 伊藤 祐子 委員 教授 小林 法一

【論文の内容の要旨】

我が国の作業療法士が考える「意味のある作業」の内容を副論文（意味のある作業とは－1995年～2010年における国内事例報告の質的検討－）にて検討した。その結果、意味のある作業は〔自ら意思表示した〕〔生活史の中にある〕〔新たな自分につながる〕のどれかのカテゴリーを含む作業であった。しかし、この検討の対象となった事例検討論文は、20歳以上のクライアントを対象としたものであった。20歳未満のクライアントの意味のある作業を、我が国の作業療法士がどのように考えているのかを明らかにし、「意味のある作業」の内容を確認するため、本研究を行った。

本研究では、発達障害領域の作業療法士20名への幼児の意味のある作業についてのインタビューを実施し、結果を内容分析の手法を用いて質的に分析した。その上で、副論文結果との比較検討から、我が国の作業療法士が考えるクライアントの意味のある作業を検討した。

結果、発達障害領域の作業療法士が考える幼児の意味のある作業は、幼児が取り組む全ての作業であり、カテゴリーは〈取り組む全ての作業〉〈親子のニーズと観察・評価から〉〈楽しい生活の支援〉〈親子ともやっていると見えるようになる〉であった。

発達障害領域の作業療法士は、意味のある作業を、幼児の楽しい生活の獲得に向け工夫や段階づけをして支援していた。そして、幼児や親と共にその作業に取り組んでいた。取り組みによって生じた感情を共有する間主観的な過程の中で幼児を主体として尊重し、取り組む経過を言葉で意味づけすることにより、幼児が、社会の中で自信を持って生きていけるよう支援していた。同時に親に対しては、障害のある子を育てながら生きる上での自信を持つよう働きかけていた。これらの働きかけは、逆境を跳ね返しさらに成長するレジ

博士学位論文内容の要旨

リエンスを高めるはたらきかけと考えられた。

幼児の意味のある作業のカテゴリーを副論文結果である成人のカテゴリーと比較すると、幼児は言葉で意思表示できないため、作業療法士が〈親子のニーズと観察・評価から〉見出した〈取り組む全ての作業〉が〔自ら意思表示した〕作業に相当する。〈楽しい生活の支援〉は、それによって幼児の生活史を作っていく時期であり〔生活史の中にある〕に相当する。〈親子ともやっていけると思えるようになる〉は、親子が自信をつけ次の作業に取り組んで自らを構築していくという意味で〔新たな自分につながる〕に相当すると考えられた。

作業療法士の考える意味のある作業は幼児と成人に共通しており、自ら意思表示し、生活史に関係し、自分自身を（再）構築する作業であった。